

野田忠教授退職によせて

赤い糸がいっぱい

医歯学系・教授 野田 忠
(小児歯科学分野)



高見さんと (1988)

2月1日、最終講義をやりながら、新潟大学小児歯科の教授として定年を迎える不思議さと、いっぱいの赤い糸を感じていました。志望は法律だったのに医科歯科大学に入り、1年生のときにスキーマの夜行列車の中で、偶然隣り合った1年先輩から小児歯科というのがあると聞きました。小児歯科に残って結婚するお金がないと騒いだら、小児歯科の草分けの落合先生のところまでバイトをさせてくれました。落合先生の診療を見て、子どもへの対応と母親の信頼を得ることの大事さを学び、僕の小児歯科のベースができました。その落合先生の縁で小児病院に行き、有病の小児の治療のすごい経験が出来、いろいろな小児に関連する医者たちと知り合えました。新潟大学へも落合先生との縁でした。

新潟大学に来て、花田先生をはじめサッカー部の先輩たちに助けられて、すんなり教授業に溶け込みました。学生担当で組んだ島田先生に大学院生をお願いし、咀嚼の発達が教室の研究の柱とな

りました。学務関係の仕事、特に歯学体の主管では、高見さんと知り合え、お酒の世界の楽しさを教わり、その後の「食べる」に彩ができました。

教養の「食べる」では、花田先生に連れて行ってもらったラ・カーヴのマスターやそこのお客のキューピットの堀川さんや麒麟山の斉藤さん、新潟日報の晴雨計での縁のケルンの山田さん、BSNのテレビで知り合った食の陣の本間さんなどとともに、委員会で知り合った農学部鈴木教授、女房の縁での教育人間科学部の小谷教授など、いろいろな人に助けられて人気科目になりました。人気が出始めたころ従弟の知り合いの記者が東京から来て「食べる」に興味を持ってくれ、新潟日報の夕刊トップの記事になりました。記事を書いた記者が関本さんで、その後も日露や枝豆のシンポジウムなどでお世話になりました。

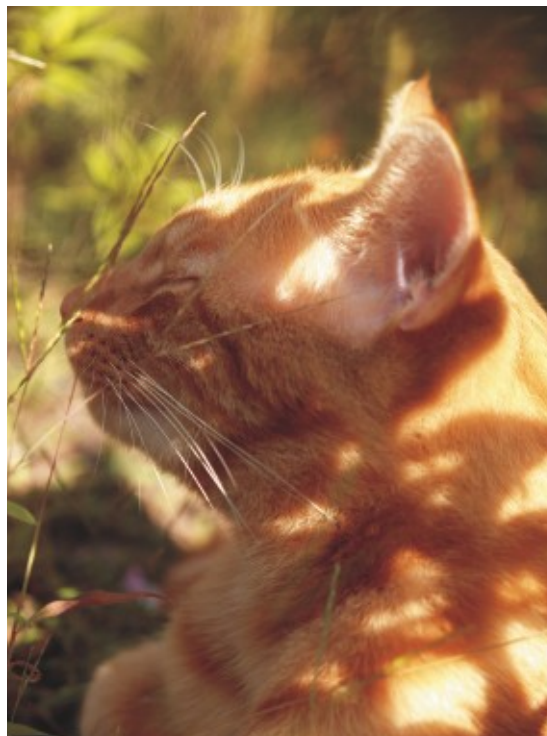
たった1人で始めた小児歯科でしたが、直ぐに中島美智子君が入局し、山崎、富沢、田口、河野君ら、その後の小児歯科を作り上げた人たちが入ってきました。それから多くの医局員が入ってきて「泣こう騒ごう小児歯科」を支えてくれました。それぞれに個性があり役割も違っていました。中でも田口君は学生との付き合いやお酒がらみの仕事、「食べる」を含んだ教授がいろいろと持ち込んでくる各種雑用を、文句を言わずにこなしてくれました。彼との付き合いも、あの学年から始めた学生セミナーが縁でした。

37歳で教授になり、青年教授だったのが、もう定年のオジイサンです。4分の1世紀を超え、社会構造も小児歯科の状況も変化してきましたが、

「子どもは未来です」。人生80年の時代、次の世界を担う子どもたちの口腔の健康を育み、一生涯健康に楽しく、美味しく、うれしい顔をして食べるための基礎作りに、保護者や小児科など、子どもに関係する全ての人たちと連携して、大きく小児歯科が発展してくれることを願っています。

患者さんからも学生さんからも、事務の方々か

らも、いろいろなものを学び、いろいろ助けられ、いろいろな縁ができました。新潟大学で定年を迎えますが、ここに書かなかったいろいろな人や出来事を含めて、たくさんのいろんな赤い糸がここまで導いてくれたのだと思います。長い間ありがとうございました。



野田 忠教授 最終講義・講演を終えて

小児歯科学分野 田 口 洋

野田忠教授の最終講演が、「泣こう騒ごう小児歯科から28年」と題して、平成19年2月1日(木)午後4時30分から6時10分まで、副病院長の宮崎秀夫先生に座長をお願いして歯学部講堂で行われました。この最終講演は、新潟大学大学院医歯学総合研究科小児歯科学分野（野田忠教授退官記念実行委員会）が企画しましたが、新潟大学歯学部同窓会ならびに学内外の皆様方の多数のご後援を得て盛会裡に開催できましたことに対して厚く御礼申し上げます。補助椅子を用意はしたのですが、それでも足りず立って聴いていただかざるを得なかった方々には大変ご迷惑をおかけしました。なお、最終講演に先立って当日2限（午前10時15分から11時45分）の小児歯科学の講義では、先生の学部学生（4年生）への最終講義が行われ、想い出深いスライドでは思わず先生が言葉に詰まるという場面もありました。

最終講演は、昭和54年の新潟大学への赴任後に

実践してこられた独自の診療スタイル「泣こう騒ごう小児歯科」の背景にある子どもとご家族への配慮、さらにその深い結びつきを通しての小児歯科だけでなく歯科診療全体の将来への展望をビデオも交えてのお話でした。また、研究と学生教育についても熱い思いを語られ、結びに新潟大学でお世話になったことへの謝辞を述べられ閉会となりました。

講演終了後、歯学部大会議室で懇親会を開催させていただいたところ、多数の皆様のご参加をいただきました。講演でも話に出た昔の講義テキストや各種資料、図書などの展示と同時に、教授会や部活での懐かしいスライド等の上映などもあり、最後はサッカー部のスタイルでということで、澤田宏二先生と花田晃治先生に音頭を取っていただき、全員が円陣を組み野田先生にエールを贈ったの散会となりました。



川島博行教授退職によせて

第三幕への前奏曲

医歯学系・教授
(細胞機能制御学分野) 川島博行



本年3月末日で定年退職します。退職に当たって特別な感慨はないけれど、無事卒業を迎えることを可能にして下さった多くの方々にお礼を申し上げたいと思います。私は、「セレモニーをしない」ことを持論として来ましたので、今回もそれを固守して、記念のパーティーや最終講義は省略しました。教室員の先生や一部の先生方のご好意を無にすることになって誠に申し訳なく思いますが、先生方のお気持ちはありがたくお受けいたしました。なにとぞ、私のわがままをご容赦ください。

さて、退任の挨拶として書きたいことは山ほどありますが、教育と研究に関しては歯学部同窓会誌第27号に詳しく書きましたのでそれを参照していただくとして、ここでは、その他のことを書こうと思います。

人生は三幕からなる演劇やオペラに喩えることができると思う。すなわち、生まれてから社会人になるまでの第一幕、社会人になってから定年退職するまでの第二幕、退職後から死までの第三幕である。新潟大学における11年は、私の人生の第二幕第五場に相当する。職場毎に一場と数えれば、の話である。多くの方々の支援のお蔭で、それぞ

れの中で人生を楽しむことができたが、第二幕全編を通じて「カルシウム代謝に関する研究」というテーマ音楽が流れていたことも幸いしたに違いない。本学においても、研究仲間にも恵まれたことは、上に引用した文章に書いた。ここでは、新潟における私の日常生活に触れてみようと思う。

私の一日は5時に起床することから始まる。食事が終わると6時、自宅から大学までは最短距離で3km、ルートにもよるが、30~40分歩いて6時30分~40分、遅くとも7時には職場に到着する。教室のメンバーが揃うのは10~11時頃、私が帰宅するのは19時~20時頃、最後のメンバーが帰るのは23~24時以降だから、いわゆるコアタイムは11時~19時となる。セミナーその他はすべてコアタイムに済ますことになるが、飲み会はコアタイム以降に行われるので、3次会まで付き合えば帰宅は4時頃、私の場合は睡眠時間が殆どないということになる。シャワーを浴びただけでそのまま勤務したことも何度かあるし、都合によって通常よりも早く出勤する場合には、帰宅するメンバーとすれ違うこともあった。そのようなことがあっても11年間自炊を続けることができたのは、上記生活のリズムを守り抜いた故であろう。テレビを置かない、という選択も良かった。野菜は、四季を通じて白山市場で購入したので、背中のバッグの重量の大半を野菜が占めるということも少なからずあった。

一年を通じてこの生活リズムを守ったので、冬は朝も夜も暗い時間に歩くことになった。季節を問わず、朝はジョギングや犬を散歩させる人たち

と一緒にすることが多いのだが、外見上私もその仲間の一人と思われていたのだろう。中には、私の荷物の中味に興味を持ったり、何を仕事にしているのか知りたがったりする人もいて迷惑だった。ウソをつくことはなかったが、本当のことをいうこともなかった。一番面白かったのは、ある夏の出勤途上、ボヤのあった家の近くで、職務質問されそうになったことや、まだ暗い冬の朝、ゴミ掃除のオジサンに間違えられたことだ。また、信濃川のやすらぎ堤の近くを通る時に決まって出会うので、どちらからともなく挨拶を交わすようになった70歳代と思われる男性は、いつも20リットルくらいのビニール袋一杯にゴミを集めながら走って来る。犬と散歩をする人の多くは、彼を見習う必要があると思う。信濃川沿いの散歩道を歩く楽しみは何といっても桜の季節に止めを刺す。毎朝、花見をしながら出勤できるからである。白山神社の梅や藤もよいが、夏の終わりから秋にかけての蓮の花も見事で、無骨な感じを否めない葉や茎とは対照的にその華麗な美しさが際立つ。

さて、週末はヒマになるかということこれがなかなか思うようにはいかない。日常手をつけられない原稿書き等業務の延長線上にあるものや、学会や関連の各種委員会、会議など、職務用語では社会的貢献という、およそ言葉のイメージとは合わない雑用があり、その上学生諸君の再試験などにも付き合わねばならず、というわけだ。連休くらいは家族と一緒に過ごすように努力しなければならない単身赴任の身としては、自由な時間は思いの外少ないものだが、学生時代から第二幕全体を通じて少ない時間を有効利用する習慣を身につけてきた私にとって、新潟にいるメリットは大きかった。新潟は、海も近いが登山の対象となる山も多いからである。しかも、早朝に車で出かければ、その日のうちに戻ってくるのが可能である。実際、日帰り登山できない山は新潟県には殆どない。私が日帰りで登った最も遠い山は山形・秋田県境の鳥海山である。この時は、早朝4時に新潟を出発、7号線を鶴岡まで北上し、鶴岡から山形道に入って終点酒田港で降りた後、遊佐町から滝の小屋を経て湯の台道を登るという鳥海山の登山ルートでは最短のコースを採った。9時30分から歩き

始めて、登り4時間（ランチタイムを含む）下り2時間、15時30分には駐車場に戻ることができた。快晴の秋の日だったので、紅葉を十分に楽しむことも出来て達成感のある一日となった。2006年10月のことである。

スキーシーズンなら新潟の位置はさらに理想的である。午前券を使って休みなく滑れば、3km以上のコースでも少なくとも10本はこなすことができる。年甲斐もなくガツガツすると言われるのだが、時間を節約しながら体力の維持に努めるのだから許してほしい。このようにすれば、午前中だけで1日分の運動量をこなし、午後から研究室で仕事をすることも可能になるのだから。

また、3月になって雪が落ちてくれば、守門山や浅草岳など頂上から滑降できる山が多く大いに楽しむことが出来る。もちろんリフトもゴンドラもないので歩いて登ることになるが、気分はよい。ひとりで登っていると、カモシカがわざわざ近くに寄ってきて、こっちを見ながら、傍らをすり抜けるように追い抜いて行くことがある。「どうだ、追いつけるかな?」という感じだ。「なあに、下りはこっちの方が早いぞ!」と思いながら見返してやるとそのまますすたと行ってしまふ。彼らは好奇心旺盛で危険を感じなければ平気で近づいてくる。またこの時期は、溪流釣りの解禁も重なり、暖かい日にはイワナのライズも見られるので、釣り師としての血も騒ぎ分身在欲しくなる悩ましい季節だ。

ひとつだけ残念だったのは、予め計画された場合以外は、研究仲間とこれらの楽しみを分かち合うことが出来なかったことである。私と他のメンバーとの活動の概日リズムが大きくずれているうえに、天気とも相談しなければならないからだ。

遠出する時間を割けない日は、信濃川沿いのコースを走る。もちろん、この選択が圧倒的に多い。日本海に沿ったルートや橋を渡って対岸にまわる場合も加えると、5km~20km超まで実に多様な組み合わせが可能であり、使える時間や気分に合わせて望みのルートを選ぶことが出来て都合がよい。走っている時には、職場とは異なる視点でものごとを考えることができるので、予期せぬ副産物が得られることもある。いよいよ時間がない場

合には買い物に行く時間を利用する。例えば、紀伊國屋書店に行くためにわざわざ走って行くのである。私は関屋分水の分岐点近くに住んでいるので、往復すれば十分な運動量になる。

学生主体の行事では、運動会、サッカー大会、ソフトボール大会、バスケットボール大会等も大いに楽しませてもらった。基礎系の研究室単位ではチームを作ることができないので、最初のうちは希望者を募って合同チームをつくり参加していたが、医歯学総合研究科に移行した時期を境にしてそれも立ち消えとなった。大学の姿としては、やや余裕を欠いているようで、寂しい気がする。だが、これも学生側の働きかけ次第で変えられると思うのだがどうだろうか？ 運営に当たった諸君の労を多として感謝するとともに今後の展開に期待したい。サッカー部の企画で、新潟スタジアムの芝の上でボールを蹴ったのも忘れがたい思い出だ。また、北海道同人会、通称チバラギ県人会など毎年七夕の頃に催される親睦会も楽しかった。研究室の飲み会やスキー旅行に何度か参加してくれた学生諸君との交流や薬理学の単位を取得するために合計12回も試験を受けた強者（つわもの）諸君との根競べも新潟でなければあり得な

ったかも知れない。

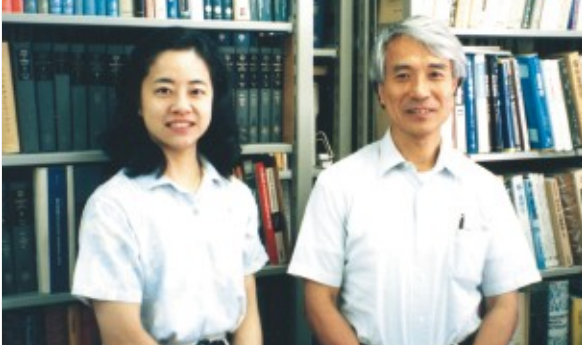
このように時が流れて、私の人生第二幕第五場は、幕が降りる寸前まで来た。第五場は、第二幕全体の仕上げのつもりでいたのだが、同時に第三幕への序奏（助走）も兼ねることになった。幸いなことに新潟の11年間を公私ともに楽しむことができたので、次のステップに進むための余力を残すこともできた。関係諸氏のご支援と自身の幸運に感謝したい。前奏曲も終わりを迎えようとしている現在、幸か不幸か、私の人生の第三幕のシナリオはまだ書けていない。どのくらいの長さになるかについても、神のみぞ知ることだ。場の数は確実に減るはずだが、第二幕とは異なる展開になると思って楽しみにしている。

以上、本学に在職した11年間の主として私的な部分、遊びの部分について述べました。上に引用した文章を併せて読んでいただくと、本学における私の公私にわたる有り様（よう）が明らかになると思います。在職中にお世話になった教職員各位、研究仲間、そして大学院生、学部学生の皆さんに心からの感謝を捧げます。ありがとうございました。



熱き真理の探求者

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 池 亀 美 華
口腔形態学分野



11年前の4月、川島博行先生は新潟大学歯学部歯科薬理学講座の教授として赴任されました。川島教室開講当初の3年間、私は助手として先生の下で仕事をさせて頂きました。大手製薬会社の研究所長から、給料が1/2とも1/3とも噂される国立大学教授への転身、その理由が「自分の追求したい研究をする時間を、たとえ5年でも延ばしたいから」。先生の研究に対する真摯な情熱には、崇高さすら感じられました。川島先生は一流の科学者として、骨代謝研究を中心に高度なご研究を続けてこられました。企業と大学でキャリアを積み、そしてアメリカでも助教授をされるなど、幅広い経験の持ち主でもあります。そのような卓越した人物をお迎えすることができ、新潟大学歯学部は計り知れない恩恵に浴することができたのではないのでしょうか。ここで、当時の印象深かった出来事を、いくつか振り返ってみたいと思います。

川島先生は毎朝7時前に出勤され、常に新しい情報に目を光らせ、新たな研究分野にも挑戦し、日々の研鑽を怠らない方でした。自分の研究の目的を忘れることなく、浮気をせずに、ひよらずに、ひたすらゴールを目指して追求するという姿勢を、身をもって教えて下さいました。ご自分に厳しいだけに、教室員にも高いものを求められ、常に身が引き締まる思いがしました。このときご教示頂いたことは、今も私にとって研究を続ける上での大切な財産となっております。また、厳しかった反面、手料理で教室員をもてなして下さい

うな暖かい一面もお持ちで、特に、御自ら釣ってこられたヤマメやイワナを、料理して振る舞って下さったのは感動的でした。

教育面においても、川島先生の高次元を追求する情熱は遺憾なく発揮され、新潟大学歯学部の学生は、とてもレベルの高い講義を受けるチャンスに恵まれたと思います。薬理学分野は日進月歩ゆえ、先生は常にその最新の情報を講義に反映する努力を惜しまれませんでした。試験は厳しく、合格点に達しなかった学生が、昼休みといわず夕方といわず列をなして質問に来ましたが、先生は一人一人に丁寧に説明しておられました。

こうした川島先生の高い活動性を支えていたベースは、強靱な体力と気力であったと思います。それを現す逸話は数知れません。例えば、歯学部恒例大運動会で大活躍された翌日、車を飛ばして富山まで行き、フルマラソンを完走し、次の日には涼しい顔で大学に来られる、といった具合でした。さらに、その体力を培ってこられた、たゆまぬ努力にも頭が下がりました。先生は、わざわざ大学から3キロ近くも離れたところにマンションを借り、歩いて通勤されていました。「毎日歩いてこられるなんて、先生は意志がお強いですね。」と申し上げると、「いや、僕は意志が弱いから、自分を追い込んでおかないとね。」と謙遜されていました。

常に真理を求め、より高いものを目指して切磋琢磨する、そんな「熱き真理の探究者」というのが、私の中の川島先生のイメージです。先生が新潟大学歯学部で、ご定年退職を迎えられる日までご尽力され、多くの学生、教室員をご指導・ご鞭撻下さいました事に感謝し、また心からお祝い申し上げます。11年間、お疲れ様でした。そして、これからも、どこまでも高みを目指すそのチャレンジャー魂あふれる背中を、私たち後進の者達に見せ続けて下さることを願ってやみません。

宮川修教授退職によせて

退職によせて

医歯学系・教授 宮川 修
(生体材料学分野)

1966（昭和41）年12月1日、学生時代を含めて約7年を過ごした工学部から、創設もない歯学部に移り、爾来ともに歩み続けて40有余年。第1～41期生まで約2,000名の学生さんと出会いました。この間お世話になった多くの方々感謝しながら、歩みの一端を簡単に回顧させていただきます。

移った当初は、講義・実習が4ヶ月後に始まるというのに、歯科材料に触ったことさえなく、まさに「ぶっつけ本番」でした。全国から資料を集め、実習の予備実験に明け暮れました。文字通りゼロからの出発でしたから、いろいろな装置・器具を手作りしました。歯科材料の使い方を理解するため、見よう見まねで上下顎の全部床義歯を作ったりもしました。そうした過程で培われた土壌に発芽したものが研究へ発展していきました。

私のバックグラウンドは二つ、金属学と材料力学（医学領域では生体力学と言う）です。工学部学生は4年次に一年間の卒業研究が課せられましたが、私は3年次から、古川 徹先生の研究室に出入りして「17-7 PH ステンレス鋼の時効硬化機構」の研究をお手伝いさせていただきました。助手として配属された材料力学講座では、亡き近藤誠治先生の指導のもと塑性力学をかじりました。どちらも、究めるには短すぎる期間でした。しかし、医学などの学際的分野では幅広い知識が必要です。「二兎を追う者は一兎をも得ず」と言われそうですが、学んだ一つ一つを役立てるよう努力してきました。

「生体用金属としてのチタンの歯科応用」の研

究を始めたのはほぼ20年前でした。5年ほどしてSkin Holes of Titanium Castingsを書き、はからずもそれが、当時制度化されたばかりの学会論文賞を受賞して励みになりました。チタン、特にその表面はとても有用でおもしろい性質を有しています。ですから、歯科鑄造、表面改質、表面-生体相互作用などが教室の主要な研究テーマになり、関連する多くの論文、総説、解説が発表されてきました。

生体力学では、有限要素法（FEM）という強力な研究ツールに出会い、本邦で最初にこれを歯科の力学的問題に適用しました。初の頃は東京大学大型計算機センタに通いましたが、やがてFEMプログラムと英語ワープロソフト（いずれも自作）を、当時はまだあまり性能がよくなかったPCに組み込みました。こうしてJ Biomechanicsに投稿した「Canine retractionのための矯正装置」に関する論文が最初の英語論文でした。さらに、医学部情報処理室のPC20台と、専用に開発した「コンピュータ支援の生体力学教育システム」とを使って選択実習を行いました。この選択実習から生まれたグループが「インプラント周囲組織の生体力学負担」に関する研究を行ってきました。どの論文もそれぞれの意義を持ちますが、Biomechanical aspects of marginal bone resorption around osseointegrated implants: considerations based on a three-dimensional finite element analysisは印象強い一編です。詳細は省略しますが、生体の力学的

適応の妙を示唆するように思えるからです。今後は、もっと精細な、または大規模なモデルを使った研究に発展していくでしょう。陰ながら応援できれば幸いです。

創設時から今日までいろいろなことがありましたが、それらを回顧するスペースはありません。ただ、初代教授塩川延洋先生を引き継いだ1994年

以降に、激動の時代に突入していったように思います。とりわけ、法人化の行く末が気になりますが、皆様がそれぞれの持ち場における諸問題に果敢にとりくまれることを確信します。終わりに、皆々様のご健康と益々のご繁栄・ご発展を祈念して退職の挨拶とします。



宮川教授の退職に寄せて： 宮川先生と彼のこと

生体材料学分野 渡 辺 孝 一

彼がこの道に進んだのは、全く偶然であった。そのことに詳しく触れるのは表題から逸脱するので、別の機会に譲るが、とにかく面接の時、曲がりくねった廊下を進んだことを記憶している。その時、教授は塩川延洋先生で、歯科理工学とはどのようなものかスキンナーの本を開いて説明して下さった。首尾よく合格したようで4月に入って、正式にスタッフに紹介された。

当時、教授は塩川延洋先生、講師は宮川修先生、助手が大野弘樹先生、技官は中野周二さんと野本（本間）ヒロさん、という構成メンバーであった。彼は2番目の助手として採用されたのである。講座全体の占有面積は現在より広いような感じであったが、当然、新入りの助手に個室などあるわけは無く、彼は宮川先生と同室させていただくことになった。後から振り返っても、このシステムは有効に機能していたと感じた。つまり彼は歯学部出身でも、技工士学校出身でもないため、とりあえず歯科理工学とは何をするとするか、身近な人にいろいろ聞くことが重要な仕事であったから、傍にその道の先輩がおられることは大変ありがたかった。彼はいろいろなことでの失敗では枚挙に暇は無いが、この業界でこれまで働かせていただいたのは、仕事上で大きな失敗がなかったためだと、いまさらながら宮川先生に感謝している。

当時は細長い部屋に背中合わせに座っている机の配置であった。はっきりした時期は覚えていないが、彼がようやく落ち着いて周りを見ることができるようになった時、同居人、つまり宮川先生が変なことをしているのに気付いた。チラッチラッと見るだけであるが、何か図形を描いてそれを細かく区切っているようである。良く観察するといろいろな大きさの三角形に分けているようであった。彼はその時、流行のパズルかゲームだろう、

というくらいにしか感じなかった。しかしながら、その図形の区分作業が半端な時間ではなく、かなり根を詰めた作業のようであった。それから時々外出されるようであった。そのため、彼はますます不可解になった。彼のモヤモヤがスッキリしたのはそれからしばらく経ってからであった。

一部の読者はお気づきになったと思われるが。有限要素法(FEM)を用いて応力解析を研究されていたのであった。ご存知の方は自明なことかもしれないが、それ以外の読者もいらっしゃるかとも思い、少し説明させていただく。有限要素法の原理は単純かもしれないが、現実に関に立つほどの物体(形状)に適用するとなると、コンピューター無しでは全く不可能で、レベルは当然変わっているが、現在でも相当のパソコンでないと結果が出るまで何時間もかかる膨大な計算である。つまり宮川先生は当時、三角形の要素に分けて、入力データをカードにパンチし(懐かしい言葉である)、五十嵐地区に設置されたばかりの新潟大学計算機センターを使用されていたのであった。少し後になって、その計算機の性能も追いつかなくなって、当時国内最高の計算能力を持つ東大の大型計算機センターまで出張して使っておられた。計算能力の進歩、イクオール、有限要素法の実用化でもあるので、その意味で、宮川先生はまさに最先端の研究をあの木造の校舎で進めておられたのである。そう思うと、彼があの時「何のパズルですか?」と聞かなくてよかったと、今でも思い出すたびに、冷や汗三斗の思いである。宮川先生は有限要素解析のテーマで、東京医科歯科大学から学位を授与された。

最後になりましたが、退職されてからも、ご健康でおられることを祈念いたします。

退職される教授の先生方によせて

歯学部長 山田好秋

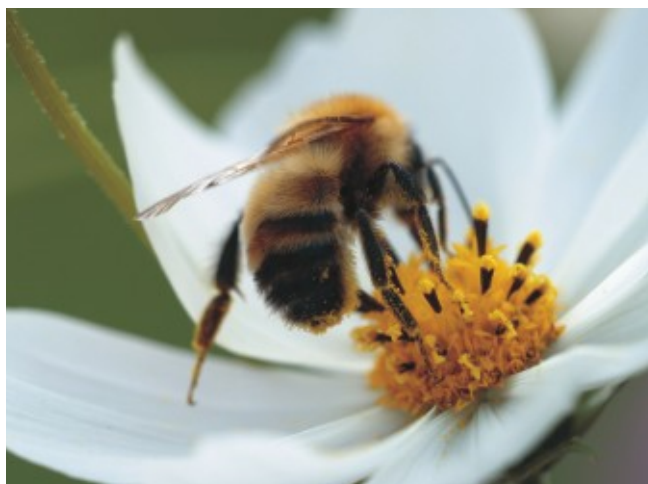
この3月をもって川島博行先生、野田忠先生、宮川修先生の3名の教授の先生方が退職されます。3年前であれば「退官」という言葉でお送りしたのですが、国立大学法人新潟大学に属する法人職員に身分が移ったことで、「ご退職おめでとうございます」という言葉を添えて本歯学部への長年のご貢献に対し感謝の言葉を述べたいと思います。

川島先生には1996年4月に民間の研究所からお出でいただき11年間、野田先生は1979年4月に国立小児病院よりお出でいただき28年間、そして宮川先生には新潟大学歯学部の創立当時（1966年12月）から40年間、お勤め頂きました。今でこそ新潟大学歯学部も古参の歯学部として位置づけられていますが、新潟医科大学時代の建物やプレハブから解放されたのは1970年代前半のことです。宮川先生はそんな劣悪な環境から教育・研究を始められました。一方、野田先生の場合は少し狭い思いをされたものの教室開設まもなく今の研究棟が増築され、施設の点では恵まれた環境で過ごされたと思います。川島先生は歯学部の歴史の中では施設・設備がある程度整った時代にお出でいただきましたが、民間の研究所から比べれば問題にならないくらい劣悪な研究環境であったと思います。

しかし、260名の学生収容人数に対し100名近い

教員をもって教育にあたる恵まれた環境は他にはありません。しかし、教員はそれぞれ年を重ねて行くものの、学部生は常に20歳代の若者であり、学部教育の中で常に若い気持ちを保持できる仕事であったことは先生方にとっては素晴らしい環境だったと思います。学生の質を議論する場面もありましたが、大学全入時代を迎えた今も受験生の確保に奔走する必要もなく、学生の就職を心配する必要もない、安心できる学部の一つであります。ただ、日本経済の衰退と共に基盤校費の削減、施設の老朽化などで不満は多かったと想像します。特に、医歯学総合研究科の設置に伴い大学院教育が忙しくなったにも関わらず、設備・予算でご不便をおかけしましたこと、この場を借りてお詫び申し上げます。退職後はそれぞれ思い描いていた方向に進まれると思いますが、時々新潟大学歯学部のことを思い出してください。

約40年の歴史をもつ歯学部には多くの退職者がおられます。新しい職場から歯学部を見守ってくださる先生、ご自宅で悠々自適の生活を送られている先生など様々ですが、残った教職員がいずれ来る退職の時期を楽しみにできるように、先生方のご指導・ご鞭撻をお願いいたします。



退職されます教授の先生方へ

新潟大学医歯学総合病院副院長 宮崎 秀夫

川島先生、野田先生、宮川先生ご退職おめでとうございます。

今年は一度に3名の教授の先生方が定年退職を迎えられ、歯学部も急激な様変わりを余儀なくされています。一時代を築いてこられました先生方の業績、ご貢献に対し心より感謝申し上げます。

川島先生は、長いアメリカでの研究生生活を経て民間の研究所に移られた後に、新潟大学へ赴任されてこられました。新潟大学では私の方が先輩ですが、人生の先輩として到底かなう相手ではありませんでした。非常にインパクトの高い業績を増産されながら、質の高い学生を排出すべく教育も手を抜くことをなさいませんでした。教授会での存在感は衆目の一致するところであり、何より発想が日本の国立大学的ではありませんでした。川島先生に代わるご意見番不在はどうなるのでしょうか？

野田先生は、私が新潟大学に赴任した1995年当時の歯学部附属病院長でありました。あれほどの患者治療をこなしつつ、病院中を飛び回り病院の管理運営に尽くされていたことを思い出します。この時期の足腰の鍛錬が、今なお山歩きされる体力維持に役立ったのではと思ったりもします。先生のお人柄や歯科医療に対する姿勢は最終講演に良く表れていました。歯科治療技術や研究業績の

誇示は一切無く、小児の心身形成への配慮ある診療体系の構築や生涯の健康維持を決定づける小児期に歯科医療介入を行っているという自覚など医療の原点を考えさせられました。また、患者や医療スタッフとのコミュニケーション能力は先生の卓越した人間観察眼に起因していると感じさせられました。

宮川先生は歯科理工学、生体材料学の教授としてご活躍なさいました。新潟大学一筋の教育・研究生生活だったこともあり、新潟大学をこよなく愛していられっような印象を持っています。先生の学生教育に関する教授会での発言は、常に、学生の立場に立った筋の通ったものでありました。

正直なところ、お体をこわすこともなく、大学法人化後の厳しい環境から解放されました先生方が非常に羨ましく思われてなりません。オットー・フォン・ビスマルクの言「患者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」を引用しますと、先生方が心血を注いで築き上げてこられました良き歴史を、残された我々は間違えることなく引き継ぎ賢者にならなければこの時代を生き残れないと思えます。先生方には末永く健康に留意され、引き続き生きた歴史として新潟大学歯学部の発展のために必要なお指導、ご教示を念願する次第であります。

